

2020年8月16日 礼拝説教要旨

「主はわたしの光」

詩編第27：1～4、ヨハネ8：12

第27編4節に注目しましょう。「ひとつのことを主に願い、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿り、主を仰ぎ望んで喜びを得、その宮で朝を迎えることを」新しい翻訳、聖書協会共同訳では「わたしが主に願った一つのこと、わたしはそれを求め続けよう。命のある限り主の家に住み、主の麗しさにまみえ、主の宮で尋ね求めることを」と訳しています。新共同訳の「主を仰ぎ望んで喜びを得」という部分は「主の麗しさにまみえ」としています。「主の麗しさ」言い換えれば、神さまの美しさを見て喜ぶこと。詩人はそれだけを求めていこうと言っています。そこにわたしたちの求めるべきこと、人生最大のことがあると言います。

神さまの美しさとは何でしょう。神さまの姿、形が美しいということでしょうか。美しい教会、礼拝堂でしょうか。プロテスタント教会には美術品も装飾品もありません。神さまの美しさをどこで感じ、どこでその美しさにまみえるのでしょうか。手がかりとしては、四節の「主の家」「宮」という言葉から神殿でささげられる礼拝を考えることができます。日曜日の礼拝は、神さまの美しさにまみえる場所であると申し上げてよいでしょう。そこでわたしたちは神さまの御言葉を聞き、その御業を讃え、救いを喜び、礼拝をささげます。ですから神さまの美しさとは、御言葉に示される神さまの救いの御業であり、そこに成り立つ神さまとの和解、また救われたすべての被造物が醸し出す喜び、感謝も含めて、そこに神さまの美しさが現れるということです。あるドイツの神学者は、天地創造の時に、神さまがすべての造られたものをご覧になられて「極めて良かった」（創世記1：31）と言われたことに神さまの美しさがあると言います。それは神さまに祝福された世界の美しさであり、すべてが神さまとの和解、調和の中にある美しさであります。神さまの美しさとは、わたしたちが自然を見たり、美術品を見て、美しいと感じることとは違います。わたしたちの存在も含めて神さまの救いの御業に参加すること、わたしたちが神さまを礼拝すること、祈ること、そこに神さまの美しさがあります。

では、その礼拝、祈りはどういう状況でささげられているのでしょうか。「さいなむ者が迫り、わたしの肉を喰い尽くそうとするが、わたしを苦しめるその敵こそ、かえってよろめき倒れるであろう。彼らがわたしに対して陣を敷いても、わたしの心は恐れぬ。わたしに向かって戦いを挑んで来てもわたしには確信がある。」（2、3節）ここには戦いのイメージがあります。そういう戦々恐々とした状況です。これはダビデのことをすぐ思い起こすことができます。サウルに始まり自分を攻撃するものが後をたたなかった。けれどもダビデは、そういう中で「主はわたしの光」と神さまを讃えました。むしろそういう状況の中でこそ、神さまの光、美しさをわたしたちは見るのではないか。苦境に立たされ、そこに光はないと感じたところでこそ見えてくる光、そこに現れる美しさ、それこそが神さまの美しさなのではないでしょうか。

今年は戦後75年ということで改めて戦争について考える機会も多かったのではないのでしょうか。NHK スペシャルで「証言と映像でつづる原爆投下」という番組がありました。長崎に原爆が投下された時に、たくさんのキリスト者が被爆し、多くの方々が命を落とされた。患者の治療をしていたある医学生が、傷ついた多くの信者がそれでも神さまに祈りをささげている姿を見て、最初はなぜこんなに酷い試練を与える神さまに祈りをささげるのか疑問に思った、嫌悪感さえ抱いたと言います。しかしやがてその祈りが原爆を落とした人も含め、すべての人類が犯

した罪に対する懺悔の祈りであることを知った時に、そこに「人間の最高の尊厳を見た」という証言を残しています。彼が見た「人間の最高の尊厳」これが神さまの美しさでなくて何でしょう。そのような極限状態の中に神さまの美しさは現れるのです。

今はそういう戦争の経験はありません。でも例えば今日ここに集まってくるわたしたちは、それぞれに心にかかることを持ち、悩み、重荷を抱えています。自分のこと、家族のこと、病気のこと、経済のこと、人間関係、あげたらきりがありません。わたしたちは決して平穏無事な日々を過ごしているわけではないのです。恐れや不安があります。そういうギリギリの状況の中で礼拝をささげる。でもそこにわたしたちが醸し出す美しさ、人間の最高の尊厳があります。それは神さまに信頼するゆえに動かされない、凜とした美しさとも言うのでしょうか。そういう美しさをわたしたちは持つことができる。その源は何でしょうか。その答えが1節です。「主はわたしの光、わたしの救い、わたしは誰を恐れよう」(1節)

旧約聖書で神さまを光と表現するのは意外とめずらしく、あとはイザヤ書に数カ所見られる程度です。この「光」は創世記の天地創造のところで「光あれ」と神さまが言われた「光」と同じ言葉です。つまりこの「光」は被造物の太陽の光とは違う、もっと根源的な光と理解すべきです。すべての命を造り、すべてを成り立たせる光です。その光を「わたしの光」とする。我がうちに光を持つこと。それがあの凜とした美しさの源なのです。どうしたらそれが可能になるのでしょうか。その光こそ、わたしたちの救い主イエス・キリストに他なりません。イエス・キリストが、我がうちに根源的な光を持つことを可能にしたのです。

ヨハネ福音書に「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(8:12)とあります。キリストこそ、あの天地創造の時の光であり、その光はまことの光としてこの世に来られました。主イエスは十字架とよみがえりの御業によってその命の光をわたしたちの中に輝かし、新しい命を始めさせてくださいました。洗礼を受けてキリストと結ばれることによってわたしたちも光の子となります。だからこそ主は言われます。「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」(マタイ5:16)と。わたしたちの礼拝も普段の祈りも、この世の暗闇に輝く光です。今、暗闇に包まれている時代だからこそ、わたしたちは礼拝をやめてはいけませんし、祈りをやめてはいけません。むしろこのような暗い時代だからこそ、神さまのうるわしさ、命の光が際立つのです。そしてそれは必ず人々の希望の光となるでしょう。